

歌の周辺

私は四国の田舎の小さな港町で生まれ育った。中学生の時だったが、夏の或る夜、家族が皆出かけて留守番の私は蚊帳の中で布団に横たわり、ラジオから流れる「耳なし芳一」の朗読を聴いていた。平家の墓地に坐つて盲目の芳一は琵琶を奏でながら壇ノ浦の戦いの様子を語るが、いろいろあつて最後に亡霊が芳一の耳をちぎり取る場面まで来ると、恐ろしくて声も出ず、そのあとトイレにも行けなくなつた。

右の歌はそれから十数年後に詠んだもので、平家の亡霊とは全く無関係だが、家のどこかの暗がりにいるかもしれない靈魂を想像することで生まれた一首。

(高野公彦)



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・18

ぶだう呑む口ひらくときこの家の過去
世の人ら我を見つむる

——『汽水の光』

【鑑賞】口が体内の闇の入り口だとすれば、葡萄一粒が通るくらいの口の開きは闇の吸引力を強める絶妙な大きさである。そこから入り込み、作者をざわりと動かしたものは何か。古い日本家屋の夏座敷はほの暗く冷ややかに、湿りを帯びた畳や柱が匂う日常の異空間であり、そこには家霊の気配が漂う。床下や廊下の奥、かつて私たちは見えない何かと暮らしていた。

(福士りか)



ふるさとコレクション——189

静岡挽物（静岡県静岡市）

挽物^{ひきもの}とは、ろくろを使って木をくり抜いたり成形して作る製品のことである。お盆やお椀、雑道具や家具の部品など様々な製品があるため、一度は目にしたことのある方も多いただろう。その技術の歴史は古く、古代の挽物としては陀羅尼を納めた法隆寺の百万塔が有名である。やがて職人たちは長い年月をかけて木地物素材が豊富に取れる場所を転々とし、日本の各地に挽物を広めた。

静岡に挽物の技術が伝わったのは元治元年（1864年）。駿府城の近くに静岡初の工房が開業し、多くの技術者が育成されたと言われている。初期は足踏式のろくろを使用していたが、明治時代には動力に蒸気が使用され始め、大正時代には電気モーターが用いられるようになり、日本一の生産高を誇った時代もある。

今、私の手元にあるのは挽物所 639 という工房で作られたボールペン。この工房ではひとつひとつ素材の個性と向き合うように挽いているのだという。この小さなぬくもりの背景には長い歴史と多くの人の手があるのだと考えると非常に感慨深い。

（写真・解説 杉本 なお）